

疲労・病気・老化に打ち克つ

生命力の源

マスター・

オブ・エナジー

の秘密のしくみ

ホンモノテクノロジー
「サイモス60」のすべて



CYMOS60

小田進一 Shinichi Oda
開発者、ライディック社長

万人に合う水、万人に合う化粧品を追い求めて30年
ついにつかんだ「気エネルギー」の宇宙的本質
これからの世界は

サイモスライフへと変わります!



はじめに

「あなたのやっていることは、生きていますか？」

「必要悪」と闘い続けた男が今、現代に伝えたいこと」

「必要悪」ひつようあくという言葉があります。

この世の出来事は、いいことばかりで成り立っているわけではありません。私は、そのことを化粧品業界で学びました。

私は40年近く、化粧品屋をやっています。だからこそ、はっきり言えることがあります。

化粧品に、「効くもの」は何もありません。

春と秋の年2回、化粧品会社は新作のコスメを発表します。それはただ、流行をつくっているだけのファッションの世界です。しかし、肌は生き物です。生きているものに、自分でないものを与えれば、それは異物になります。化粧品を「シミや吹き出物、乾燥肌などにもものすごく効果のあるもの」という感覚で使っている人が多いと思いますが、それは機械的な考え方です。生き物は機械ではありません。人間は、全体で自分をコントロールする生き物です。ですから、体の悪いところだけをクローズアップして、その一部となる部品を変えても意味がありません。しかし、現代人は人工的につくられたものに囲まれ、機械的な考え方をするようになっていきます。その証拠に、今はサプリメントの世界に入っていく人が増えていきますよね。つまり、どんなにいい化粧品を使っても、その使い次第で効果を出せず、その価値を変えてしまうのです。

では、女性にとって、スキンケアに最も適しているものとは何か。それは、自分の汗と脂あぶらです。化粧品会社もそのことを知っていて、そこに近づこうとしています。が、どんな

にそれに近づこうとしても、そんなものはつくれません。化粧品は、異物だとわかってい
るのに、女性はそれでも化粧をしていかないといけないのです。

化粧は女性にとって必要なことです。ところが、我々男性は、化粧をしません。顔を洗
うのだって、その辺の石けんで洗って、スカツとしたらそれで終わりです。でも、女性は
石けんから気にかけて、顔を洗います。それなのに、肌トラブルで悩んでいる人は、女性
が圧倒的に多いのです。それも、ずっと化粧品を気にかけて、肌対策をしてきたはずの40
代以降の女性による肌トラブルが目立ちます。その原因は、間違った思考によって、化粧
品の使い方を間違えているからです。

私は、化粧品を研究し、肌から大切なことを教わってきました。

化粧品は異物ですが、女性は一生涯、化粧品と付き合っていかなければならない。風呂
に入って化粧を全部落としても、またすぐにつける。寝ても覚めてもつねに化粧品ととも
に人生を歩んでいます。女性は、自分の顔から化粧品が離れることは、ほとんどありませ

ん。一旦使い出したら、死ぬまでです。棺おけに入ってもメイクされているのですから、永遠にです（笑）。どうして、そこまで女性は化粧をするのだと思いますか？ きれいにやりたいから。今はそう考えている人が多いと思いますが、化粧をすることには、本来ちゃんという意味があるのです。

化粧品のことを、「cosmetics」といいます。

「cosmetics」という言葉は、宇宙「cosmos」と縁の深い言葉です。女性は、化粧をすることで宇宙と交信し、感謝するために化粧をします。朝、目が覚めて、「きょうも元気でありますように。ご主人様も元気でいてくれますように」と感謝を込めて祈るような気持ちで化粧をする。それが、化粧の本来の目的であり根本です。ですから、どの国でも、その長やリーダーは身を清めて、整えて、宇宙と交信するときに化粧をします。それを、女性のみなさんは毎日やっていらっしやるのです。感謝を込めて、化粧をしていますか？

化粧品には意味がある。化粧品には、必要性があるのです。しかし、現実には自分ではないものを、生きている肌につけなければいけない。必要なのに、悪いものを使わなければいけない。これが、現代に生まれた必要悪なのです。

私は、みなさんにお伺いしたい。

「あなたのやっていることは、生きていますか？」と。

化粧品を使うことは、決して間違えているわけではありません。ただ、それを正しく取り入れ、正しく使うことで、そこに生じているひずみを解消してほしいのです。ひずみは、ストレスになります。そして、ストレスは病気の原因になることもあります。しかし、ただ思考を変えるだけで、使い方を変えるだけで、そのストレスから人々は解放されるのです。

私は40年以上、「必要悪」が常識となっている化粧品業界で、化粧品の開発を進めてき

ました。最初は、「40代の女性が悩む肌トラブルから、1人でも多くの人を救ってあげたい」という思いから研究を続けてきました。その研究の中で生まれたものこそ「サイモス60」であり、サイモス60は現代に生きる人たちのマスターキーとして、さまざまな可能性を開いていきます。この本を通して、みなさんにサイモス60の本当のすごさをご理解いただき、すべての人がストレスを解消され、安心して暮らしていける世の中になってほしいと願っています。

ライディック技術研究所 所長

ライディック株式会社 CEO 小田進一

はじめに

「あなたのやっつけていることは、生きていますか？」

↳ 「必要悪」と闘い続けた男が今、現代に伝えたいこと」 1

Part 1

サイモス60が誕生するまで

電気という「見えない世界」で起こった大事故 14

10年間苦しんだ体を救ったホンモノの効果 16

ホンモノの力を伝えるため、化粧品会社へ 19

1人でも合わなければダメ！ 万能の化粧品を求めて 22

Part 2

サイモス60と叡智が集結し、ホンモノテクノロジーへ

化粧品の本質は水であると気づき「水の旅」へ 26

奇跡のヒーラー張志祥氏との電撃的な出会い 31

この世のすべての物質に含まれる情報のみを取り出す 35

気エネルギーから知った陰・陽、中庸の関係 38

波動を記録する「フロップピーリキッド」とは？ 42

情報を固定化する水「フロップピーリキッド」の完成 47

生命のマスターキー「サイモス60」との出会い 51

個人個人の生命信号パターンを発見 56

細胞を活性化するサイモスコア「+21」 59

生まれ持った生命信号・魂(KON) 66

特別付録

- 「 $12 \times 5 \parallel 60$ 」の数式が導く四魂一霊 70
- サイモス60から学んだ「見えない世界」のしくみ 73
- 元素を生み出す八次元の真実 77
- 宇宙のしくみから見つけた新たな「必要悪」 80
- ストレスに打ち克つ「自分力」で闘う生き方 82
- 自分力で手に入れる本当のリラックス 85
- 生命の源が誕生するメカニズム 89
- 波動やエネルギーだけでは語れない「自分力」の世界 93
- サイモスから見えた「宗教心」の正体 98

【ヒカルランド座談会】サイモス60と人類誕生の謎

Part 3

サイモス60が現代と融合する「もうひとつの世界」

- 浄水と活水の順序 106
- 究極のエネルギ―調整 109
- ワックスを塗ったサイモスの竹のフローリングがすごい 111
- 中庸の説明の仕方 112
- サイモス60の展望 115
- 全部自分用に調整してくれるカードが存在する!? 118
- 小田進一社長の印象 120
- 応用無限大／現代を生きるためのサイモス60 124
- ドクターシナジー／シナジーウオーター 127
- サイモスの課題① 違う番号の水を体に取り入れるリスク 135

- サイモスの課題② 効果を消してしまう油性マジック 139
- やり直しを繰り返して生まれた化粧品「ウルズ」 142
- サイモスプレートと浄活水器「メトリックMEBIUS」 145
- 寝心地も抜群！「アスファ加工」によるサイモス寝具 152
- 住環境を豊かにする「サイモス60 IN健康フローリング」 155
- 健康に役立つ「アデーレ加工」の信楽焼 157
- 食べるほど身体が喜ぶサイモス食品 159
- 私に、大きな影響を与えた3人の人物 161
- 現代を生きるためのベースとなるサイモス60 167

おわりに

- 生命力の源？ 霊魂「49〜59番」の秘密を追って 171
- 〜超変人で超天才で超人柄が良い開発者の挑戦〜

Part 1

サイモス60が誕生するまで

電気という「見えない世界」で起こった大事故

私は40年以上もの間、化粧品の開発を進めながら、自然の中にあるホンモノの力の秘密を探ってきました。しかし、最初から、化粧品会社で働いていたわけではありません。若い頃は、電力会社に勤務していたのです。ここでは、電気という「見えない世界」との戦いが繰り広げられています。今思えば、若い頃からその「見えない世界」と向き合ってきたからこそ、見えない世界の中にあるホンモノの力の存在を信じて、ここまでやってくることができたのかもしれない。

私の右手の親指と人さし指を見ていただくと、指紋がすでに切れてなくなっています。これは、停電復旧作業を担当したときに起こった事故が原因で、この事故こそが、私の運命を大きく変える転機となりました。

その日は、台風でした。台風の影響を受けた電線に不具合が起こり、私はその復旧作業を担当することになったのです。高い電柱の上での復旧作業だったので、足元が不安定な状態でした。もしかしたら、焦っていたのかもしれませんが。電気が通っていない電線にテスターのコードを引っかけるはずが、誤って右手で生きた電線にさわってしまったのです。その瞬間、右手の親指と人さし指から電気が入り、心臓を通過して左手に抜けました。完全な感電です。そのときの電力は、約3000ボルト。電線をさわった瞬間、それは本当に一瞬の出来事のはずなのに、何が起こったのかがすべてわかったのですから不思議です。私の指から、青い光が体の中を一瞬で走りぬけました。それはもう、「やってしまった!」という感覚です。まるで後ろから、鉄の塊でゴーンと頭をたたかれたような衝撃を受け、私はそのまま電柱の上から落ちてしまいました。一歩間違えれば、コンクリート道路の上に落ちて、即死だったかもしれません。しかし、私が落ちた場所は、水を張って田植えをしたばかりの田んぼの上でした。水と土がクッションとなり、私は運よく助かることができたのです。それでも、3日間は意識不明の状態でした。

10年間苦しんだ体を救ったホンモノの効果

電気事故に遭ったとき、私はまだ24歳くらいだったと思います。その事故から10年間は、七転八倒の苦しみを体験しました。体の運動感覚がなくなり、ドアのあけ閉めをするだけでもガーツと冷や汗が出るような状態で、乗り物にも乗ることができず、日常生活を普通に送ることさえできない状態が続きました。しかし、その時代の医療では、その症状を治すための治療法はなく、改善することも難しい状態でした。

そんなとき、会社の先輩から、クロレラをすすめてもらいました。健康食品の1つとして「クロレラ」という言葉を聞いたことがある人も多いでしょう。私が教えていただいたクロレラは、ただそのまま飲むものではありません。クロレラを餌えさとして食べさせたデメキンを、ミンチにして生で食べるのです。最初少し抵抗があったのですが、食べてみると不

思議なことに瞬時に元気になっていくのがわかり、体の軸がピシッと定まったのです。

このクロレラの強烈さを語るエピソードがあります。死を間近に迎えられていたある患者さんが、ついにお亡くなりになりました。そうすると、病院から親族に「亡くなった」という知らせが入ります。その連絡をしたあと、病院は事前に用意していたクロレラを食べさせたデメキンを取り出します。そして、デメキンの腹を割り、中に溜まっているクロレラを取り出すのです。そのクロレラを、亡くなった方の口をあけて、舌の上のにせるのだそうです。すると、約3時間、長い人で約4時間。亡くなったと思っていた人が目を覚まし、最後のお別れができたというのです。すごい話だと思いませんか。「そんなにいいのであれば、クロレラをデメキンに食べさせて、自分も食べてみよう」と考える人もいるかもしれませんが、みなさんは絶対に真似をしないでください。デメキンは、いろいろな菌を持っているので、食べたら死んでしまう危険性もあります。私を実際に食べていたデメキンは、自然の中で育ち、自然のクロレラだけを食べさせていた特殊なものです。その危険性や動物愛護の考え方が強まったこともあり、今は禁止されています。

あと、クロレラと同じように、私が摂取していたものがもう1つあります。それは、ゲルマニウムです。私が摂取していたのは、ツクシの根から採れるゲルマニウムで、末期がんなの人が痛み止めとして使用していたようなもので、こちらは今も、使用を禁止されています。私にとってクロレラは、瞬時に自分の体を整えてくれるもの。そしてゲルマニウムは、痛みを和らげてくれるものでした。今は、どちらも使うことができませんが、私はそれらの経験から、自然のものには本当にすごい力があることを知ったのです。今は、いろいろな事情があって、自然の中にあるホンモノの力を手にできなくなっていました。でも、これまで自分が経験したり、体験してきたことは真実であり、きつと何か意味があるはずだと思っています。その後、私は電力会社を辞めました。自分の経験をちゃんと伝えたい、それができる仕事を見つけないかと思ったからです。自分には何ができるのか、いろいろな自己啓発にも挑戦しました。その中で、気がつけば私は化粧品会社に就職していたのです。もし、ここで私が化粧品と出会っていなければ、生命に関する答えを与えられることは、永遠になかったと思っています。

ホンモノの力を伝えるため、化粧品会社へ

化粧品会社に就職したものの、私は化粧品のことを何も知らない状態でした。私が電力会社を辞めた理由は、「自然の中にあるホンモノの力を、たくさんの人に伝えたい」という思いがあったからです。ですから、化粧品のことはわからなくても、化粧品は体のことを考えてつくるものだし、みなさんに喜んでいただけるのであればと思いつながら働いていました。

しかし、化粧品会社でいろいろな仕事をさせてもらう中で、私はある事実を知りました。それは、化粧品は「ごまかしの世界」でつくられているものだということです。40年前は、キュウリの絞り汁や、バナナを絞って抽出したエキスを使用した化粧品などを販売していました。最初は、「キュウリやバナナを使った、すごくいい商品だ」と思っていたのです。

が、言っていることと、やっていることが違っているという違和感をどんどん持つようになっていったのです。

ここでみなさんに覚えておいてほしいのは、世の中には「自然派化粧品」はあっても、「自然化粧品」はないということです。

化粧品は、肌につけます。肌というのは皮膚であり、それは体の膜です。体の膜である皮膚は、体の中を守るために存在しています。細胞にも地球にも膜があります。膜とは、その中を守るため、外部と遮断するために存在しているものなのです。ですから、化粧品は厚生労働省の薬務課が薬と同じように管理しています。薬は皮膚というバリアを破り、栄養が中に入るようにして、効くようにしなければいけない。ですから、薬は薬剤師のもとの販売しかできません。しかし化粧品は、薬務課が管理しているのに、専門知識を持たない人でも、誰でも販売できる。それは、効かないものだと証明しているのと同じです。このように薬務課では、効くものと効かないものと、どちらも管理しています。

また、化粧品を使う人は、新鮮なものがいいと思っています。例えば食べるものであったら、栄養素として取り込むので、新鮮なほうがいい。しかし、フレッシュな食べ物を皮膚の上につけたら、皮膚は荒れてしまいます。外部の紫外線、空気、ほこり、いろいろな化学反応も起きます。食べ物は新鮮なほうがいいですよ。この食べ物は、保健所で管理します。しかし、化粧品は保健所の管理ではなくて薬務課です。効かないことを管理しています。それなのに、みなさん「これを塗ったら、どんなに効いてくれるだろう。そして、どんなにきれいになるか」と思っていますよね。

このような化粧品業界の実態を知るうちに、私はこのままでいいのかと考えるようになりました。きれいになりたいと願う女性を騙^{だま}してお金をもらうために、電力会社を辞めたわけではありません。そして、化粧品会社を辞める決意をしたのです。

1人でも合わなければダメ！ 万能の化粧品を求めて

化粧品会社を退職後、私は自分がやるべき仕事を探して、いろいろなことに挑戦しました。しかし、何を始めても不思議なことに、必ず化粧品の世界に引っ張りこまれてしまう。女性がいる世界に戻ってきてしまうのです。化粧品から逃れられない自分がいることに気づいた私は、「それなら、女性のためになる化粧品をつくろう」と考えるようになり、やっと化粧品の世界で生きていく覚悟を決めることができました。これが、会社設立のきっかけとなったのです。

独立したときのコンセプトは、「すべての女性が一生安心して使い続けられるものをつくる」です。これは、今も変わっていません。ところが、それを実現することは、簡単なことではありませんでした。

今、ライディック株式会社が運営するライディック技術研究所のオフィスには、ある化粧品を入れるための容器が置かれています。その容器には、まだ化粧品が入っていません。最終的に入れるにふさわしい化粧品が、まだ見つかっていないのです。つまり、その容器に化粧品を入れたときこそ、私が求める化粧品を完成させたときとなります。しかし、この容器の中に入れられる化粧品には、まだ出会っていません。ですから、今も容器だけが飾ってあるのです。

現代の化粧品は、「ごまかしの世界」 Ⅱ 「必要悪」の中でつくられています。だからこそ、自分が本当の意味で満足できる、コミットメントした内容のものをつくりたい。そのために、私は今も研究を続けています。

化粧品というものは、異物でしかありません。そして、その異物を皮膚につけるのです。皮膚の役割は、栄養を吸収して体に与えることではありません。外部から、余計なものを

体の中に入れてないようにシャットアウトする膜として、体の中を守ることです。塗り薬は、肌塗ることので体の中に入ります。それは、バリアを壊して傷めることで中に入ります。「これを塗ったらシミが消える」と期待する人がいますが、私から言わせれば、むしろくちゃなことをやっているわけです。しかし、現代に生きていく以上、必要悪の世界から簡単に抜けられるわけではありません。では、どうすればいいのか。私は、女性のための化粧品をつくろうと決めたからには、今の状態を何とかしたいと考えていました。そこで、いろいろな原料を試し、1人1人に合わせた化粧品をつくり、その中で2つのこだわりが生まれたのです。

1つは、販売する前に、その人に合っているか合わないかを明確にして販売すること。
1つは、内容です。異物である化粧品を使うことで、異物反応を起こすことなく、すべての人に安心して使い続けてもらえる内容にするためにはどうすればいいのか。どの化粧品にも、合う人と合わない人がいます。しかし、万能の化粧品をつくるからには、1人でも合わない人がいてはダメなのです。この問題を解決するために、いろいろな実験を重ね

ました。1人1人に体質的な特徴があるように、1人1人に適した成分のミネラルバランスがある。これは確かなことです。ところが化粧品は、そのミネラルを全部排除しなければいけません。つまり、化粧品に使われている成分は、効かないもので固められている。この状態の中で、私は2つのこだわりを実現する化粧品をつくらなければいけなかったのです。

化粧品の本質は水であると気づき「水の旅」へ

すべての人に安心して使い続けてもらえる化粧品をつくろうと原料や成分を調べていくうちに、私はあることに気づきました。それは、化粧品には原料でもなく、成分でもなく、誰もさわっていない自然のままのものが存在すること。それが、「水」でした。

水が大事だということに気づけたのは、女性の肌を見ていたからです。肌がきれいな人は、井戸からくみ上げた水をかぶっている人や滝に打たれるような修行をしている人など、自然の水をふんだんに受けている人が多かったからです。そのような人たちは、どんな年齢でも肌は美しく、肌トラブルを抱えていない。みんな、この素肌を求めているはずで、これこそ万能の化粧品だと思いました。

しかし、化粧品に使われている水は精製水で、もともとは水道水です。

化粧品に使われる水は、工場にある水道の水を精製して使います。これは、化粧品業界での決め事であり、自然のものをそのまま使うことはできません。その理由は、化粧品にはいろいろな成分が入っているからです。ミネラルが入った水を使ってしまうと、化学反応を起こしてしまう恐れがあるので安定しません。化粧品には、「生産した状態で3年はキープすること」という決まりがあります。自然のものを使うとすぐに腐ってしまうので、それはやってはいけません。食べるものと肌につけるものでは、180度考え方が違うことをご理解いただかなければいけません。

私は、「化粧品に、自然のままの水が使えないのであれば、女性が顔を洗うための水をつくろう」と思いました。自然のままの水を使い、みんながあこが憧れる素肌をつくれれば、きっとメイクもきれいに肌にのるはずだと考えたからです。これが、私が水づくりをスタートさせたきっかけです。しかし、これも簡単につくれるものではありませんでした。どんなにいい浄水器をつけても、井戸水にまさるものがないのです。では、どうやって水をつく

っていったらいいのか。ここから、私の「水の旅」がはじまったのです。

水を探していくうちに、さまざまな技術に出会うことができました。「防腐剤を一切使っていないのに、対象物に噴射すれば一切腐らない水」と出会ったこともありました。その水を卵に入れて焼き、卵焼きをつくります。その卵焼きは、1カ月置いても腐らないはずなので、1カ月後に社内のスタッフ全員で食べたりにして。「防腐剤を入れなくても腐らない水なら、うまくいくはずだ！」と思いましたが、これもアウトでした。あるときは、「火傷やけどした肌に水をシュツと噴きかけるだけで、痛みが止まり、早く回復する水」にも出会いました。この水は、肌を傷めている人や悩んでいる人を、救うことができると思っただけですが、この水も失敗でした。

腐らない水や痛みを止める水など、いろいろな水を見ましたが、どれも失敗で終わってしまう。私の失敗の基準とは、すべての人に同じ結果が出ない水です。うまく作用する人もいれば作用しない人もいる水ではなく、すべての人にいい結果を与える水でなければ

ば絶対にダメなのです。100人に試したなら、100人に合うものでなければいけない。99人に合って、1人でも合わない人がいたら、それは失敗なのです。自然のものは、万人に合うはず。1人でも合わない人がいれば、それは私の求めているものではない。ですから、「できた！」と喜んでいても、そのうち合わないという人が出てきてしまいます。そうになると、せっかく何カ月もかけてやってきた研究も、またゼロに逆戻りで、全部やり直します。これまで何度もやり直しを繰り返しましたが、私が求めている水は絶対にあると信じていたので、ここまで続けてくることができました。そして、それは実際にあるんです。だから、私は諦めあきらなかつた。

99人に合うものをつくれれば、商売としては充分成立します。しかし、それは私の求めているものではありませんでした。商売をするのであれば、それなりに合うものをつくれたらいいのかもしれませんが。しかし、私以外の人と同じことをやっていては、会社を辞めた意味がないと思っていました。このように失敗を繰り返し、何度も研究をやり直していたので、取引先からも、ついには社員からもバッシングを受けるようになりました。しかし、

「私は、これをやるために生きてきた」と胸を張って言える、自分の生きがいを手に入れていたのです。その生きがいこそ、万人に合うものをつくりだすことであり、絶対に諦めるわけにはいきませんでした。

北投石ほくとうせきがいいと聞けば、台湾の北投まで石を取りに行ったこともありました。そんなことを繰り返ししている中で、私の中で「金山の水が一番いい」という結果を得たのです。金山の中にしみ込み、ちよろちよると出てくる水が一番よかったです。そこで、約6000万円かけて栃木にある金山の権利を押さえました。そして、穴を掘り、水を取ったのです。しかしその水も、水としてはいいのだけれど、私の求めている水ではなかった。これで、6000万円が一瞬でパーです。こんな経験をして、私は万人に合うものをつくるための水探しをやめることはありませんでした。